

テーマ演習「つちのいえ」2015 前期 _ レポート



村井農園

村井陽平（プロダクトデザイン専攻 M2）

私は、昨年まで住宅建材メーカーにて、住宅のエクステリアデザイナーとして量産住宅の一部となる建材のデザイン業務を担当していた。

企業の強力な販売網を通して、自身がデザインした物が日本中に広がり、一生に一度の買い物である「家」として選んで頂けた喜びは大きい一方で、その喜びは自身がメーカーのデザインを大量に生み出すシステムになっていくにつれ、次第に薄れていった。

自分が生み出した物が大量に生産され、人々の生活の中で消費されて産業廃棄物化していくサイクルに疑問を感じ始め、自分が何の為にデザイナーになりたいと思ったのか、もう一度考えるために企業を出る決意に至った。

そして、学生に戻り修士課程最後の履修科目として、テーマ演習の「土の家」を選んだ。私がこれまで企業で働く上で取り組んできた事と、相反する所があったからだ。量産品にはもちろん多くの利点があり、いかに早く人が使う完成形に出来るのかを徹底的に考えられており、耐久性にも優れて非常に合理的だ。

しかし、欧州の大学への留学経験の中で、日本のように新しい物を使っては捨ててを繰り返す、便利である事があたり前となっている世の中が、果たして幸せなのかを考えさせられる場面が多々あり、日本の消費スタイルの価値観の中でしか生きていない自分に強い危機感を感じた。

これらの事から、この授業に取り組む姿勢として、私達が普段何不自由無くしているモノを、最初から苦勞する事が解った上で体験を大切にしながら作り上げていきたいと「畑」を企画し、実際にそこに住む人達のリアリティーと価値観を共有したいと「越畑・格原の棚田」に向かった。

越畑は亀岡の山奥に位置し、非常に不便な場所で、近くにコンビニも無ければ病院もない。加えて、棚田は通常の畑に比べると収穫面積が少なく、非常に非効率な方式だと知った。それでは何故、越畑の人達がそこに住み続けるのかと迫ると、そこには先祖代々その土地を守ってきた、先人達人の尊敬の念と郷土愛があった。

もう少し便利な所に出て農作をすれば、もっと生活は楽になる事は間違いないが、心の幸福度とは便利である事と必ずしもイコールではない。

産業が発展すると、人々の生活は画期的に豊かになる。しかし、それと同時に忘れていってしまう事も多くある。

アフリカや、東南アジアでは、未だに現地でもとれる自然素材を用いて家を建てている民族がいる。日本でも、私の故郷である富山県の世界遺産「五箇山合掌作りの集落」の人々は、自然と共生している。

不便な環境に住む人々が、不便であるから幸せでは無いかというと全くそうではない。先進国を旅する機会があったが、日本のように便利な国は世界中見渡しても見つからない。しかし、我々は本当に幸せなのだろうか。

現代に生きる我々は、様々なモノに溢れて価値観のイメージを失う病気に陥りがちだ。

この授業の序盤に井上先生が口にした、「土は何かを混ぜたり焼いたりしない限り、どれだけでも再利用する事ができる」というワードは、私にとっては凄く衝撃的であった。解体される家の土堀を壊して土に戻し、それをまた使って出来上がっている現在の「土の家」は、私がこれまで企業の仕事の中で考えてきたエコハウスを嘖笑するような発想の、究極のエコハウスと言えるからだ。

土の家は、壊さなければいけない場面があったとしても、またその土を再利用して別の場所に現れ、その過程の中で現代に生きる人々に体験も与えるソーシャルデザインだ。

授業に参加する中で、極力文明の力を借りずに土を再利用して土の家の壁を塗り直した

り、山を切り崩して畑を作った行為は、非常に貴重な体験だったように思う。畑を作る事が目的ではなく、自分遠の手を実際に動かす中で、モノと人とが対話するフィジカル体験こそが最大の成果だ。

村井農園で作った野菜はとて不格好であり、味も市販品に比べて決して良くないし、かけた時間や手間からすれば凄く馬鹿らしい収穫量で、スーパーマーケットに行けば簡単に買ってしまう。

しかし、自分達が炎天下の中で汗をかきながら必死に耕した体験は、お金では絶対に買えない経験であり、改めて「モノJ」と自分を見つめ直し、自分の生き方を考えてみる授業となった事は言うまでもない。

ニンニ・マクリン（陶磁器 M1）

前期のつちのいえは村井農園に参加した。授業を選択したときは、畑をすると夢にも見ていなかったが、いつの間にか盛り上がり興味をわいた。棚田というのは私にとって珍しいから、どのように作るかは気になった。棚田を見学しに越畑に行ったのはおもしろかった。とてもきれいな場所だった。元々村井農園で水田を作りたいと計画していたが、水田の準備は1月に始めると教えてもらったので、今回は棚田でおかば、そば、夏野菜を植えることにした。

私は8月に帰国しているため、しばらく作業に参加できない。9月に帰ったらもう色々な野菜収穫できそうで、楽しみだ。しそジュースを作る約束しているが、9月にできるのではないかと思う。そばの収穫は10月なので、収穫祭はその時期にあわせて行おうと考えていた。

棚田を作るのに一番苦労したのは、土はほとんど粘土だったことである。腐葉土を混ぜながら畑をたがやしたが、かなり荒い土を使うことになり、野菜は育つかどうか不安だった。対策として荒い土地でも強い植物を意識して選んだ。それにしても、めが出てきて、野菜も初収穫できたのは感動した。生命力を感じることは、畑をすることの一番の喜びかもしれないと思った。

畑の粘土をさわって、陶磁器の学生全員で制作に使えないと思った。個人的に興味を持って、焼成の実験をした。そばを食べるのは村井農園のひとつの目的であるため、さらにそばちょこを作ってみた。粘土として荒くてあつかいにくいではあるが、みんなで何かを作る企画もしてみたらおもしろいと思った。後期の作業のひとつとして考えたい。

作業を始めたのは遅すぎるため、最初に計画していた水田はできなかった。後期にできないか、改めて検討したいと教えている。

作業の内容は学生自ら計画する形だったが、畑以外の班もおもしろいものができてきた。自分たちでアイデアを考え、問題解決をし、そして明るく作業をできたからとても楽しかった。少人数の班であったから、仲良くなれたと思う。日本に留学して、意外だけど特別な思い出になりそう。

柳 在昊（プロダクトデザイン M1）

○村井農園のメンバーとして

半年はあっというまでした。見学の後から我々は何を植えようか、どんな畑をデザインしようか、楽しいことばかりでした。太陽の光が強くふりそそぐ時は農民の心が感じられました。その後は早く種をまいて萌え出ることを願いました。その段階の中で農園のみんなはいつも明るく楽しむ事ができました。4月から7月まで3ヶ月間が私には大切な時間でした。デザインの勉強では学べない土の家だけの本物の汗の結晶でした。

○土の家を半年間の思い

この授業はどこでもできないことを学べる授業です。私はそう思いました。韓国でも芸術大学で自然の大切なことを教えてくれる授業はどこでもないです。それを日本に来て京都市立芸大で学んだことは、卒業して社会に出ても一生忘れない思い出です。韓国の大学から見学に来た時に、私は学校のガイドとしてつちのいえを紹介してあげた時でも、自然の価値や美しさを学べれる授業ですと紹介しました。見学後、韓国の先生から質問がありまして、「この授業はいいと思うけど木を棄損しながらツリーハウス作るのは自然に悪いことだと思わないの？」って私にききました。私は「いいえそう思いません、人間が紙を使いながら木の大切なところが見えますか？それではないと思います。この授業はそれより木のそのままのことを学び、自然を利用しながら共存することを学びますよ。」と答えました。その時この授業でしかできないことを感じました。私もこの授業でいいことを教えて貰ったことでした。

○土の家にお問い合わせ

この授業は京都市立芸大のアイデンティティーとしてつづく行って欲しいです。京芸らしい授業は土の家だと思いました。毎回に同じ事ができないけど、自然の価値、土の力、芸術の発想が学べると思います。

砥綿 菜（総合芸術学3回生）

○作業への参加

私は本授業で、棚田（および畑）を作る「村井農園班」に加わって作業した。土を耕すなどの実作業にも微力ながら参加したが、私が最も貢献できたのは作業計画などを決める話し合いでの進行だと思う。班のメンバー一人一人からの情報をまとめ、状況を整理して、いつまでに何をすれば良さそうかということを考える。

2回生の頃から芸祭委員や総合芸術学科の授業の中で自然に身につけていった方法だが、後にこうした場所でも授業を無闇な作業にせず方向付けることに役立てられたということは自分でも驚くべき体験だった。

○作業を通じての発見、反省、考察

作業を通じて発見したことは、「目標と実験の重要性」だ。井上先生が仰っていたことの受け売りではあるが、最初に実現しやすい目標を設定して作業に細かい目処をつけると、モチベーションを保ったまま作業ができるのである。とにかく作業をしようと闇雲に手を動かしているだけではなく、それぞれの作業の成果が実感できる状態で参加するということが重要なのだと思う。

計画や目標を意識する一方で、時には実験、「とりあえずやってみる」ということが必要であることも実感した。やってみたことが全て上手くいくわけではない。現在、キュウリや植え替えたさつまいもなどがやや伸び悩んでいるというような問題も出ている。しかし、例えば後に場所を変えて新しく植えてみるというような再試行を行っていけば「キュウリにはこの土が合わない」というような特徴も見えて来るだろう。このような発見は「土が粘土質だから」という理由などで初めから種まきをしなかったなら得られなかったものだ。

今後注意することとしては、各自メンバーが作業から自然に離れていくような事態がないように今後の参加方法や程度を班の中で共有しておく必要があるということだろう。

○今後の予定

8月

・一週間に一回、ローテーション制で現地の様子見と必要であれば水やりを行う。（できるだけ部活などで登校する際に同時に行う）

・夏野菜の収穫時期はバラつきがあるため、食べごろの時期に居合わせたメンバーが収穫、食べた感想や写真などを報告する。

・シソはシソジュースにする作業が必要なため、夏休み中に全員で集まって「シソジュースと枝豆の会」を催す。

9月

・8月と同様、世話を行う。

10月

・穀物と秋野菜（イネ、サツマイモ、ソバ、小豆）の収穫時期は近いため、「秋の収穫祭」を計画する。このイベントが一区切りとなる予定。個人的には村祭りのような雰囲気でも多くの人に参加してほしいと思う。

・芸祭での活動や陶芸ワークショップなどの実現については各メンバーの予定に合わせて検討が必要。

○つちのいえへの感想

この授業で意外であったことは、一見「自由で何でもあり」であるような雰囲気が感じられるが、実際はどんな活動も闇雲な遊びにはしない配慮がされているということだ。このやり方は今後も続けていってほしい。

有吉かな子（版画3回生）

つちのいえの最初の授業で、井上先生が、「つちのいえでは、必要な物は、人から譲り受けたり、自分で作ったりしています。」とおっしゃったのを聞いて、「この授業をとってよかった!」と思いました。私はかねてから、お金がない世界を想像することが好きで、いつか物物交換で成立する村に住みたいという願望があったので、このつちのいえのモットーとにかく感動しました。作品作りが、材料や道具を買うことから始まるという「あたりまえ」を取り払い、何かを作り上げるという経験はきつと素晴らしいことだとも思いました。

今期のつちのいえでは、つちのいえの前の丘に棚田を作り、野菜を育て、収穫するという事に挑戦しましたが、自分たちでも、前期のうちに「収穫」までできるとは思いませんでした。こつこつ丘を開拓する作業は、地道極まりない上に、掘っても掘っても、出てくるのは良質な土どころか、陶器にするにふさわしい、ある意味良質な土。炎天下の下では、かなり厳しい作業になる日もありましたが、こつこつ目標に向かって進み続ける事は、普段の作品制作でも同じ事だと気づきました。

埼玉でインド料理屋をしていた父が、3・11以降、「生活を変える良いタイミングだ」と一念発起し、縁もゆかりもない徳島で農業をはじめてから、よく、父の口から「農業はアートに限りなく近い!」という事を何度も聞かされていました。

私は「ふーん」と聞き流していましたが、実際にゼロから地形を変え、耕し、種をまき、収穫物をいただくという人間が繰り返し行ってきた原始的な作業が、米や野菜を作るだけでなく、日本の風景や文化のすべてを作ってきたことがよく分かりました。実際に見に行った越畑・檜原の棚田の美しさに人が魅せられるのは、ランドスケープとしての美

しきだけでなく、先人が開拓した棚田が自然の中で村の風景として受け継がれていく文化の長い時間を感じるからかもしれません。つちのいえの棚田も、ぼちぼちとでも、芸大移転までの時間をともにできる畑にしていけたらいいな〜と、思っています。つちのいえで野菜での物物交換のようなことができたら面白いとも思っています。またいいアイデアが思いついたら、つちのいえで提案させていただくのでよろしくお願いいたします。



足湯につかり隊

北尾祥子 (陶磁器 3 回生)

つちのいえ足湯班計画書

○今後の課題

窯関係

- ・煙突作り ... 素焼きの筒を作り、1.5m 程度の煙突を作る。陶磁器の学生が用意する。
- ・窯仕上げ ... 窯内部、上部の傾斜を調整し、煙突を埋め込む。ロストルを整備する。

周辺環境

- ・ベンチ作り ... 丸太を座面に使用し、足湯用のベンチを仕上げる。
- ・土留整備 ... 穴の壁面で崩れてきている箇所を杭で土留する。
- ・整地・タイノレ張り ... 必要箇所の整地と、大理石・陶器タイノレ張りをする

風雨対策

- ・屋根作り ... 柱を立て、仮屋根より少し幅を持たせた屋根を作る。
染色の学生に蠟引きした布を用意してもらう予定。
- ・壁作り ... 風をしのぐための壁を設置。通気性を考慮し、取り外し可能なタイプにする。
現在案として上がっているものは以下の二つ。
 - ・屋根部分から布を吊り下ろすテントタイプ
 - ・柱に板材をくくりつける壁タイプ

○行動計画

基本的に後期は芸祭後から活動開始予定。夏休みは陶磁器で煙突作りの準備を始める。今年度の冬には窯とベンチ付近を整備し、人が足湯に入れるところまでは完成させる。その後は周辺の整地とタイル張り、屋根・壁の設置を急ぐ。

★ こういう規模のものをアトリエの外で 大人数で作り出す
という経馬定がなく、普段は自分の手の届く範囲で一人で、
作業することが多いので、いろいろな人の思考が重なって
作業が重なりすぎて感じがとても面白かったです。
こうして必要なくなったものが他の班に使われ、また
その逆も発生する。そして山全体をモノが行き来して
何かが出来ていく感覚は、後期からも大切にしてい
たいです。

足湯班

～いやされたい～

13316 堂本真由

日々、制作でたまりにたまった疲れを取り除くために発足。

「疲れを取るにはやはり温泉だろう。」という事で、温泉はさすがに無理だろうから足湯に決定。最終的には、足湯につかりながら窯で作ったものを食すパーティーを開きたい。(一個人としては、温泉卵を食したい...)

- 作業開始!! -

当初はつちのいえ前の斜面を利用し窯を作ることを計画していたが、場を探している課程で、つちのいえの右手の方にあった腐葉土が詰った穴を発見。元々、作品があった場所である模様。その穴は、ただ、ゴミ捨て場のような感じがして良いものではなかったので、穴を足湯に改造することに決定。

まず、沢山の腐葉土を取り除く所から開始。取り除いた腐葉土は棚田班の方々へ...。穴を掘っていると、作品があったであろう跡や様々な生物と出会った。

近々、地上へ顔を出す事になったであろうセミの幼虫を発見。生のセミの幼虫を見ることはまずないであろう。テンションがあがった。穴を掘りながら、から捨て場に大量に落ちていた、大理石だろうか?のタイルを発見。から捨て場から運ぶ作業も平行に行った。たいたい掘れてきたら、土を



たたくて軽くしめていった。すると、たいたい景色が変化し、前に比べてスッキリした。

そこで、足を付ける風呂部分を何にするか悩んでいると、長谷川先生が、彫刻棟からステンレス製の風呂がわりになりそうなものを見つけて下さった。こんな感じ  の風呂に合わせて、窯部分を作り始めた。窯は掘り下げる形にした。掘っていくと土のいろんな層が見えて奥におもしろい。粘土質の層がでてくるとテンションがあがる。窯の煙突部分は陶磁器の者が素焼きの筒をひいて



くろこじになった。掘り下げていくとまたまた腐葉土の層があったので、取除き石を入れて埋め直した。



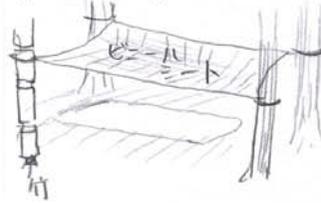
座る場と高さも合わせるために土いながを使って風呂部分を上げた。土いながは近づき隊の方々の余ったもの。掘り出した粘土質の土を利用して作った。



のちに埋め直して座る場。



次に屋根を作った。つちのいえ制作時に取り除いた土を置くために使用されていたビニールシートを利用。周りの木にロープでくりつけて簡易な屋根を制作した。一部、木ではなく、竹で柱をつかった。



いつも、穴に降りる時、飛び降りるような形だったので、階段を作ることにした。木のくいを作り、土を流し込んで踏み固めた。やはり、階段があるのとないのでは、大きく違う。上り下りがしやすくなったし、見た目にも良くなった。

階段を作る要領で、座る湯の制作に取りかかった。同じように木のくいを囲いを作り、石を埋め、土を流し込んだ。木のくいだけではバムとかがたので、間にベニヤの板をかました。

前期の作業はここまで。続きは芸祭を終えてから...



三宅真央 (陶磁器 3 回生)

前期のつちのいえで薪で焚く足湯を計画し制作する足湯班に参加した。場所は数年前に作品を展示した跡地のくぼみに決定した。くぼみには長年かけて積もった落ち葉や枝木の腐葉土で埋まっていた。

前半はくぼみの腐葉土を掻きだす作業を数回に分けておこなった。足湯班は腐葉土を掻きだしたのち、底を平らにならして打ち固める作業を行ったわけだが、今後大量のタイルや大きめの石を陶磁器棟のガラ捨て場や彫刻棟の石捨て場から運び込むことも計画していたので、運搬を円滑に行えるために以前から個人的に気になっていた音楽棟裏からつちのいえに上がる階段の整備を考えた。

そこで足湯班の内の一人と雑務班と自称して数年前設置されてから手つかずの階段の整備を計画、実行した。まず階段を設置した当初からずいぶん土が流れてしまったらしく蹴上に対して側面に打ち込まれた竹が高すぎていたので土を増して打ち固め平らにならす作業を全体に行い、部分的に竹の方を木槌で打ち込み調整した。また打ち固めた土を流れにくくするために段の両側に杭を打ち込んだ。次に階段の中ほどに木を組んで段を増やし、打ち込んだ当時のままの傷んだ杭を新しいもので打ちなおしとりあえずの階段の整備は終了した。その後足湯班に合流した。

階段が歩きやすくなったと行く人に言われるのはとても喜ばしく、作業のモチベーションにもなった。自称雑務班はつちのいえ全体の作業環境を整えるという目的に発足した。今後足湯班を継続しつつ雑務班の作業を二人で、計画し実行していきたい。かやの入手が可能ならぜひ現在傷んで、陥没している西側の屋根を雑務班でふき直したいと考えている。

塩田千裕 (染織 3 回生)

足湯班

私はつちのいえを村化するということで、癒しスポットがほしいと思い、足湯班に属していました。彫刻の方が展示につかっていた穴のスペースがちょうどよい感じで、キャンプ場みたいにするのをめざし、作り始めました。

まず、穴の深さが足りなかったので、一か月半ほどは穴をほり、雑草をかり、足場を整えました。土を深く掘るほど、土が粘土っぽくなっていったりと発見があり、おもしろかったです。

さらに一部分を深く掘り、お湯を沸かすための火を作る部分を作りました。足湯のための浴槽は長谷川先生がよいものを見つけてくださりました。

座る場所や、階段はまだ建設中で、後期には完成させて、寒い季節に足湯 & 焼き芋がで

きるというなと考えています。

後期には、屋根を取り付け、煙突を作り、足湯の中に入れるすのこや椅子を作り、タイルまでしけたらいいなと思っています。

つちのいえプロジェクトを通して、子供の頃の泥遊びや、秘密基地づくりを思い出しました。つちを掘っている間にセミの幼虫が出てきたりと、こんな深くにいるもんなんだなあと発見がありました。長谷川先生や陶磁器の子たちにアドバイスをもらいながら、作業をしていて、木の杭で階段を作ったり、専攻を越えて、一緒に物づくりができたのは大変良かったなと思いました。

最初は何となく予定や完成図を作って作業していましたが、深く掘りすぎたり、平らにならなかつたり、くずれたりして、どんどん予定とは変わっていき、作るものが増えたりと、作りながら変化しつつも完成に向かっていく感じが楽しかったです。煉瓦や木なども京芸のゴミから再利用したりと、エコなものいいなと思いました。後期は制作展や芸祭など忙しいですが、暇を見つけて皆ですこしずつ進めていけたらと思います。

森脇夢子 (陶磁器 3 回生)

つちのいえでの作業は、私は主に足湯班として活動していました。ですが、ここではその作業工程は割愛して、非公式で活動していた雑務班について記録をしたいと思います。雑務班として活動しようと思ったきっかけは、つちのいえまでに至る階段が絶妙に歩き辛いとともに気付いたからです。聞くところによると、前に作業していた人が途中のまま、止まっているということでした。だからとんなに中途半端な階段だったのか、と思い、現状を改新すべく発足したのが雑務班です。

作業工程は、まず、下のほうの階段は、側面の杭になっている竹が飛び出ている上面がへこんでいた状態だったので、新しく土を盛り、踏み固めて平らにしました。中腹から上のほうにかけでは、下と同じようにへとんでいるところを平らにする作業とともに、竹の杭が十分でないところや、杭が腐って崩れかかっていたところに、新しく杭を打つという作業もしました。その他、通りやすいように目立つ雑草を刈るなどもしました。活動宣言などしてなかったのが地道にやっていたのですが、階段通りやすくなった！と言われると達成感もありました。

雑務班はこういった地味な作業を人知れずやる、というのがモットーなので、もしかしたら階段の変化に気付いてない方もいたかもしれません。しかしあくまで目立たず、縁の下の力持ち的な存在として役に立てれば良いなと思っています。

今後の活動としては、足湯班を手伝いつつ、雑務班としても、つちのいえ周辺をもっと快適に、居心地の良いところとして改善・改良する作業を、地道に堅実にやっていきたい所存です。

2015. 8. 5.
 三回生 工芸科 染織専攻
 13320 朴美香

思っていたものと実際とは大分違っていました。はじめ
 ビデオを見、土と触れ合うことに大変わくわく。つちの
 いえの壁に土をねりこんでいったとき、とび聚しかたです。
 その後、少し休んでしまい、次に行くと到王に作業がわか
 れています。とれをやるのもあまり気が進みませんでした。でも
 一人でなにかをやるというものが不安でとやめず足湯につ
 かり隊に入ります。でもやっぱりこのようにがりがたにたんじやない
 という気持ちで、専攻のほうがいかがしかたり等々、欠席が多
 くなってしまいました。結局シラバスに書いてある「庭」とはなにか、た
 んたろうと思いは。今思えば、一人で自分のペースでいかに
 土とも、と遊んだり、「つちのいえ」に手を加えていっても良かった
 かなと思います。



土の階段、竹のシコ「たて」
 上にのぼる
 このうらなつ、ておは おれんか、たなと
 思います。



ツリーテラス～樹上で昼寝し隊



佐伯真彩

涼しかった頃に
ツリーテラスで
のんびりしたいです。
芸大生のインスピレーションが
広がる場に。

佐伯真彩（プロダクトデザイン3回生）

私は、ツリーハウス改めツリーテラス班の一員として作業に携わった。初対面のメンバーが多く、最初の頃こそあまり積極的に作業に参加できずにいたが、毎回の作業を通して、授業外でも話したり、皆と仲良くなれたのはとても嬉しいことだった。そうして、作業が進んでいくにつれて、メンバーで色々意見と意見を交わしたり、身長の高い私や低い子など色々な人が登ることを想定して、ツリーテラスの足場をつくる位置を検討したり、工芸科の工具の扱いが上手な子にコツを教えてもらいながら、材をつくる作業などを自分から行えるようになったと思う。

作業の中で一番驚きと発見があったのは、鬱蒼と茂った木や枝を切り落とすことで開ける風景だった。作業に取り掛かる前の暗い森などなかったかのように、今のツリーテラスの周りには明るい光が差し込み、風の通る開放的な場所となった。作業の最初にどんだん木を切り倒した時は、一気に光が差し込んでくることに感動したが、もっと自分の中で心を動かされたのが、細い枝を一本切り取るだけで、景色は大きく変わるということだ。低い方のテラス第1号の床が完成して、作業が中盤に差し掛かった頃、テラスに登ると茂った枝が邪魔だったので切ることにしたが、小さな枝を一本ずつ切るとにどんだん空の見え方が変わっていくのは、まるで額縁を作り出すかのような作業だった。切るのが楽しくて止まらなくなりそうになるが、過不足のない、絶妙なところに仕上げなければならない。これは、今私が勉強しているデザインや、美術にも通じることだと思った。

デザインに正解はないが、社会におけるデザインの解決策として、現状よりも良い答えを出さなければならない。雨がかからないように葉を残しながらも、床に立ったときも快適で、切り取る風景と差し込む光をベストだと思うところに近づけて空間をつくっていく。汗や木屑にまみれた手作りの作業の中に、デザインのヒントがいっぱい詰まっていた。今つくっているツリーテラスは、私たちが手探りで作っている実験台で、おそらくこのテラスが完成した時こそが、本当のスタートなのかもしれない。後期は人数が減るので実現は難しいと思うが、そのプロセスを顧みて学ぶことを大事にしたいと思う。後期では、まずは上段テラスを完成させ、その後は班員で話し合ったように、テラスをより楽しく活用でき、第二のつちのいえとして、人々が集まれる場所にしたいと思う。秋になったらテラスに座って読書などをしてゆっくり過ごしたい。また、足湯班や近づき隊のベンチが完成したら、つちのいえ OB、OG の方やお世話になった方を招待してもてなしたり、学生が参加できるイベントをして、つちのいえの丘や茶庭を知ってもらい機会を設けてもいいかもしれない。後期も継続して、人と人をつなげるものづくりをしていきたい。

樋口理菜（漆工3回生）

《ツリーハウス班主な作業内容》

6月11日→空間づくり・道具置き場づくり・ブランコ
18日→階段づくり・ミニツリーに梁づくり
25日→階段づくり・ミニツリーに床はり
7月2日→階段づくり・ミニツリーに床はり完成
9日→植物観察会
16日→上る足場の調整
23日→第2テラスの土台づくり
30日→今後の話し合い

●どの作業にどのように参加したか

空間づくりから始まり、鬱蒼としげっていた木々を伐採することからはじめたツリーハウス班。まわりをおおきくけずることによってすっきりした空間が広がり、そこからどうやって上にのぼるかを考えホゾをつくり木をうめこむという指導のもと、らせん階段を取り付け始めました。ホゾづくりは水平を保ちながらきれいにはめこむように調整していくのが難しく、少しの削り具合ではまるかばまらないか変わるところが非常に面白い作業でした。天候や木の削る場所によって固さが違い、乾いている場所、湿っている場所など、木の肌質を感じながら作業できたのもツリーハウス班ならではの内容だと感じました。

道具が地面におきっ放しになってしまうため、即席でつくった道具置き場づくりでは、見た目と安定度が反比例して、何度か倒れたこともありましたが、そのたびに地面を掘り下げてだんだん強度をもたせていくことができました。インパクトを使つてななめうちをしたり、どうやってビスを打てば強度が増し、人をささえられるのかなど、頭を使い、木の枝の生え方をみながら作業できるようになりました。支えにあたかも生えているかのように木をビスで打ち込んだりなど、見た目と実用性がよいツリーテラスがつけられるよう、今後も様々な工夫をして参加したいと思います。

●作業を通じての発見・反省・考察

ツリーハウス、ときいて最初はあるものをすべてそのまま使い、必要なものを足していくやり方だと思っていましたが、最初の空間づくりでいらぬ枝はぱっさり切り落とすことによって見晴らしがよくなり、足場が組みやすくなったことはおおきな発見でした。また、既製品を使わず、藁をつかって縄がわりにできたことも、良かったと思います。反省としては、作業前に具体的に進める内容を考えていなかったこと、ひとつの木で作

業できる人数が限られていたため、同時並行でなにか違う作業を進めればよかったと思いました。

●残った作業への取り組み方

第2 テラスがまだ梁づくりで終わっているの、床はりを終わらせるのと、ミニツリーのほうは出来れば手すりをつけて安心できるような場所にしていきたいと思っています。まだまだ使われていない生かせそうな枝や、蔦がたくさんあるのと、なによりも場所がたくさんあるので、使い心地がよく楽しい場所にしていきたいとおもっています。

岡本真侑 (染織 3 回生)

私は、入学した当初からつちのいえがずっと気になっていた。つちのいえの存在を知ったのは、入学して問もない頃の総基礎のデッサンの課題で絵にする場所を探している時だった。ん？これはなんだ？つちのいえってなんだ？なんでここに家があるんだ？という疑問が沢山浮かんだことを覚えている。この謎を解明するべくテーマ演習で、はつちのいえを選ぶことにした。また、工芸と深いかかわりがありそうで興味が湧いた。初回のレクチャーで、つちのいえフ。ロジエクトについて学んだことかかてからの謎はすぐに解け、それと同時に、思っていた以上に前から進められていたプロジェクトであったことに驚き、私も是非参加したいという気持ちになっていた。

なんとなく一番面白そうだなという気がしてツリーハウス班に参加してみたのだが、すぐ壁にぶちあたった。私には使い慣れない工具が多すぎたのだ。ドリルを使う際には悲鳴をあげていたほどで、ドリルやノミなどに対して恐怖心さえ抱いていた。だから最初はこのような工具を使う作業は誰かに任せ、私は他に出来ることを探して、板を切ったり草を刈ったりする作業や物置台をつくったりして苦手なことから逃げていた。しかし、いつまでも逃げているわけにはし、かず、私もドリルを手にするようになっていた凸そして、気づいたときには自分の手で階段の足場を一段完成させていた。その工程に、ノミで木の表面を削る、ノコギリで木材を切る、ドリルでビスを打ち込んで固定させるなどの作業があるが、いつのまにかそれを自分でこなせるようになっていた。最初は私には出来ないという気持ちで他人の作業を眺めていたけれど、私にも出来るということがわかって凄く嬉しかった。やっとこれで初めの一步を踏み出せたような気がした。後期からはもっと積極的に取り組めそうだ。

ツリーハウスの制作に携わって気づいたことは、自然を利用して造るものは自然に従うのが一番スマートなやり方であるということだ。ツリーハウスでいうところの樹木であり、足湯や農園では地形や土壌で、それに合ったものを造るということである。今回の場合だと、樹木の枝の生え方に沿って取り付けられた螺旋状の階段がその例だ。最初、どの

ように作業を進めていけばいいのかわからなかったが、まずは樹木という素材をよく観察して触れてみてやっとなにか適切であるかが見えてくるということが分かった。一度素材そのもの

と向き合うことが凄く大事なことだと感じたし、これはツリーハウスだけでなく、ものづくりに一貫して通じていることであるので、これからの制作に生かしていきたいと思った。ツリーハウスの作業に関して具体的には、前期はなにかも手探り状態であった為、計画をあまり立てずに行き当たりばったりで、やっていたことが多かった。そして作業中に感じていたことは、実際に木に登って作業できる人数は限られていて、木の下で工具や材料などを受け渡したり、木材を切ったりする人数を踏まえても4人ほどしか作業に参加出来てないということ。その為、それ以外の人は何をするかその場で考えなくてはならなかったが、それも行き当たりば通りのせいで何かに繋げられるような着実な作業はあまりできず、ふわっとしたままで、終わってしまったきがする。後期ではその点を改善するために手分けしてできる作業をいくつかピックアップしておいて、そのいくつかの作業を同時並行で進めていけたらいいなと思っているので、それについては今後班員と相談して決めていきたい。

私がこの授業を受講し始めてから毎度つづいていく想いがあった。それは、自分達の手でつくったツリーハウスや足湯や農園がある大学って最高に楽しいところだなということと“ワクワク”という、私が何かをつくるときにもっとも大事にしたい気持ちがここに反映できたら嬉しい。数年後には移転してしまうがそれまでの間に京芸に“ワクワク”させる空間を造れたらいいなあと思う。しかし、このプロジェクトについて知っている生徒はそんなに多くないだろう。まずはこのプロジェクトの存在、空間の存在を在校生に知ってもらい必要があるのではないだろうか。その為に後期の授業を通して、何か出来ることをはないか考えてみたい凸ツリーハウスを完成させるとともに、宣伝活動なんかも出来たらいいなあと思う。きっと、この空間を利用してなにか面白いことをしたいという気持ちはみんなも一緒だと思うので後期の授業もとても楽しみにしている。どんどん新しいことや何かが出来そうな予感がするのもつちのいえの好きなおところである。

高瀬葵 (日本画 3 回生)

今期はツリーテラス班に参加。作業は相応に参加したが遅刻がちだった。作業を通じて発見したことは、つちのいえ周辺の自然の遣しきだった。先週に枝を切ってもそこから次週には新芽が生えていたり、雨が降った次の日にはキノコがたくさん生えていたり、たくさんの虫がいたり、その場所で生命が循環していることが分かった。一週間で目に見える程変わってしまう環境に、人工物との違いを感じ、改めてツリーテラスをつくることの面白さを感じた。

今回の作業での反省点は、チームプレイをもっと意識するべきだったという点である。ツリーテラス班の場合、木に登り作業できるのは二人程なので、それ以外の人は何をして良いのか分からず手もち無沙汰になる時間が多かった。

このようになってしまったのも、班全体での完成形のイメージが無く、なんとなく毎週作業していたということが理由に挙げられる。今後の作業のために、具体的に何がしたいのかということのを班で出し合いたい。

今後の作業

後期に入ったら、まず二週に渡って床を貼りツリーテラスをとりあえず完成させる。そこから各自ツリーテラス周辺で作りたいもの(ハンモック、ブランコ、椅子等)に取り掛かっていきたい。

私は一度壊れてしまったブランコを作り直したい。以前のブランコが壊れてしまった原因は、蔦にあると思う。枝に引っ掛ける形で使用していたため、一点に重心がかかっており、さらに雨風の影響で蔦が傷んでしまっていた。また、座る椅子部分が斜めに傾いていたり、いまいち座り心地も悪かった。そこで、ロープを組み合わせたたり、背もたれ付の椅子にしたり、もっとレベルアップしたブランコを作りたい。

後期の作業は前期よりも人数が減るが、それぞれに役割を振り分けたり、ぶっつけ本番でやるのではなく、計画を立て、個々で調べてきたことを持ち寄り、前期より効率よく作業していきたい。

垣内美佳里 (漆工 3 回生)

私は高いところや高いところに登ることが好きなのでツリーテラス班に所属した。

かといってこれまであまり木登りもしたことなく、久しぶりに登ってみたところ、枝の強度や生え方が木によって違い、木の加工のしやすさや登りやすさが変わるので、どの木を選ぶか、また、周囲の環境も見て、登ったときの景色や木の周囲の足場は良いかなど考えることが多くあった。やはり実際に登って、触ってみないとわからないことが多いので作るというのはものを知るうえで大切なことだと思った。足場を作るときも位置や枝の生え方・強度を考えつつテラスまで登る導線を作った。人が乗るには不安な枝のような見ただけではわからない部分や木が自分を守るために部分的に腐らせてしまうことがあったり、ツリーテラスを作ろうとする過程で木の特性が知れて面白かった。また、ツリーテラスを作るという大きな目標も持ちつつ、それだけではなくて、木の周りの状態を整えるときに見つけた蔦を使って何か作ろうかといった使えそうな材料を見つけてから、それが何かに使えないか考えていく作り方も面白かった。やって見ないとわからないことや作っていく過程で新しくみつけて作って行けたことが楽しかった。

川久保美桜 (総合芸術学 3 回生)

作業をしてみて・・・私はなんとなく高いところに登れたら楽しそうだなと思い、ツリーテラス班で作業をしていました。メンバーは元々仲がよかった人が多かったことからグループ作業自体は大丈夫だとは思っていましたが、実は木登りはしたことが無かったので、どうやっていくのか全然検討もついていませんでした。また木自体は高校のときに木工の授業を選択していたので加工などは分かるのですが、木材ではなく目の前の生きている木を扱うのも最初は分からなかったです。なので一番始めに邪魔な枝や周囲の植物を切ったとき、こんなに切ってもいいのか!とすごく驚きました。(植物観察会で本当はよくなかったことが判明しましたが...)今まで自分が扱ってきた木材や作業をしたりする場所はすでに誰かが手を加えて与えられたものですが、自分の手で枝を切り開拓していくことはとても自由でいいなと感じました。

ただツリーテラスの作業自体も楽しかったのですが、もしかしたらそれ以上に興味を持ったのは周囲の生き物でした。特に虫は元々は好きでも嫌いでもないくらいでしたが、作業中に目にする虫が気になって調べていくうちに段々好きになっていきました。例えば木に白いふわふわしたエビみみたいな小さい虫が出てきたので調べると、アオバハゴロモという虫だと分かり、ついでにその近くにいた葉っぱみみたいな虫が成虫、木にまとわりついてた白い泡みみたいなものがアオバハゴロモの分泌物だと分かりました。あと害虫もマダニやムカデは噛まれると大変なので調べて対策をしたり、私は蚊にすごく噛まれやすいみたいなので対処法を試してみたりしました。実際に身を持って経験することなので、迷信などではなく科学的な根拠を持った対策を求める様になったのは大きく去年と変わるところです。しかしツリーテラスの毎週の作業を通じて、色んな生き物が現れたりどこかへ行ったりしていく光景や、メンバー達もかわいいとか言って虫を捕まえたり危ないからと言って避難させてあげたりする様子を見て、みんな等しく生きているんだなと思い、殺虫ではなく虫除けを心がける様になりました。

最初の私のツリーハウスのイメージは人だけしか生き物はいませんでした。今では木自体も生きているし、虫や他の生き物もいるんだと認識できる様になりました。

つちのいえの要望

今後の移転の話にも繋がるのですが、芸大内にもっと自由につちのいえの様なものが出来れば素敵だなと思います。最近、芸大内にいても目がつちのいえになっていて、例えば池の周辺や門を抜けてすぐの階段横などここは使えるなという場所が色々見つかります。建物じゃなくてもブランコなどの遊具やベンチでもいいし、自分たちの手で空間を生み出し、それが自然のなかで時間を持って順応していく様なことがより出来たら楽しいと思います。人、動物、植物すべてが動いているのが実感出来るようなつちのいえが理想です。本間由夏(油函 3 回生 13151)

本間由夏 (油函 3 回生)

(1) つちのいえで行った作業

今期、つちのいえではツリーテラス班の一員として作業を行った。ツリーテラスづくりは、テラスを設置する木を決めるところから始まり、その上で昼寝やお茶を飲むなど、落ちついて多目的に過ごせる空間を作ろうという目標で作業を行ってきた。

班内で行った作業は、まずツリーテラスを設置する木を決めること、そして作業がしやすいように木の回りに生えている草を刈り、落ちていた木を片付けることであった。テラスを作りやすい枝の生え方をしている木がないか探し、さらにその木の中でどのようにテラスを設置すればよいかを班員と相談しながら考えた。当初はつちのいえの南側の木を候補にしていたが、最終的には東側に生えている木 2 本にツリーハウスを設置する事にした。

選別した木の周囲にはイネ科の草が多く生えており、作業の時やツリーテラスへの出入りの不便さから草を刈った。また細い木も作業に不便だったので切り、ツリーテラスを設置する木の周囲を開けた。木の周囲が片付いた後、ツリーテラスを設置する高さを決め、木に階段を設置した。(写真 1、2)

まずシラカシの木に階段と作業台を設置し、テラスの床の梁を設置した。

その後、1 本目のシラカシの木のすぐ側にあるサクラの木を、テラスの増設のため使う事に決めた。シラカシの木の枝を 2 本目のサクラの木に括り付け、その枝の上を歩いて 1 本目の木と 2 本目のサクラの木を行き来できるようにした。(写真 3、4)

シラカシの木とサクラの木を行き来できるようにしてからは、主にサクラの木での作業を中心に行った。シラカシの木で行ったのと同様にサクラの木に階段を設置し、シラカシの木に設置したよりすこし低い位置にテラスの床の梁を設置した。その後梁の上に板を並べテラス床を作った。サクラの木のテラスが完成し、シラカシとサクラの木を渡した木の調整や、滑りやすい部分に縄を巻くなどした。

(2) 作業を通しての発見、反省・考察

ツリーテラス制作、また植物観察会を通して、今期のテーマ演習では木について学んだ。ツリーテラスは自然に生えている木を利用してどのように階段や梁を設置したら良いかなど、普段とは違った視点で木を見ることを学んだ。木に生えている枝でも、テラスづくりに活用できるものと邪魔になるものを区別し、場所によって枝を落としたりと、自然に生えている木を、素材として認識することを知った。この、自然に生えても木を素材として認識してなにかを作るというのは、普段の制作では得られない体験で非常に貴重なものとなった。つちのいえの壁を塗った時にも、同じ感覚があり、普段ありふれ

たものとして見ていた土、木などを、立派な素材としてもものづくりに生かす事が出来るのだと学んだ。また、木や土と身近にふれあううちに、自分が木や土の特性についての知識が無い事を自覚した。木や土の良さをより生かそうと思うと、その良さをまず知らなければならぬと感じた。

(3) 今後のツリーテラス、またつちのいえについて

ツリーテラス制作から、素材についての知識をもっと知らなければならぬと切実に実感したので、ツリーテラス班では、夏期休業中に京都大学総合博物館で行われる「土ってなんだろう」という土に関する展示へ行く事を計画している。つちのいえでは、実際に土や木に触れることで学ぶ事は多いが、今後素材の特性や、活用法などについて学ぶ機会がもっと増えれば、素材の新たな使い方が発見できるのはと思う。



写真1



写真2



写真3

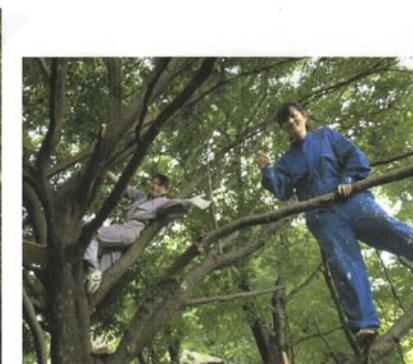


写真4

「つちのいえ 2015年度前期レポート」 13310 3回
佐藤 由輝

○ツリーテラス班

井上先生を引頭に作業をしてみました。作業が慣れていくにあたり、足場を作ってみたり、色々な所からつたを集めてきて編んでそれがブランコになったり手すりになったりとか様々なものに活用できてつたの可能性はまだまだありそうだなと思いました。

前期での作業としては、初めてだった事もあるけど具体的なビジョンのないうままにいたので、発見した気がいた事から作業が始まっていくことが多かったです。

でも私にはそれが面白くて昔の人が生活をするために様々な工夫を凝らしている様な体験だなと思いました。

後期は受講はできないですが、時間のある時に作業はしたいと思っています。

作業的にはテラスが完成しつつあるので、その完成とテラスへの昇る階段、テラス上に手すりとかを機能的にも飾装的につけたいです。材料としては、始めに切った木の枝などを使えるといいなと思います。

足場を支えるために木の枝を人工的につけ加えている方法がとても魅力的でした。ナチュラルにとけこんでいく感じが自然に対して違和感がなくて良かったです。人工物じゃなく自然のもので作りあげていくつちのいえのスタンスがとても好きです。

前期ありがとうございました。



2015年6月18日

13325 漆工

小野真希

参加した作業の内容

つちのいえ 壁の補修 → 粘土をつくり塗り

ツリーハウス(ツリーテラス)段づくり → 土をけり板をかませ

↑
階

床はり、グラコンづくり、木々のまひき

反省・考察など

つちのいえの壁を補修した際、おんごに草をまぜて強度を出す技法があったが、漆工でも、下地づくりの際、液体である漆に土の粉をまぜて強度を出すので、昔から何かをまぜて強くするという手法はベテランだったのかもしれない。

ツリーハウス(ツリーテラス)の制作では、まず場所選定から始まったが、のちに行われた木の種類についてのレクチャーで、隠れたところに生え子木が多いことがわかり、木々の葉に覆われていた故にそのような木の芽が自生していたことがわかった。

枝倉に近い方の景色の見え子木に決めた後、テラスをつくるための場所は枝葉が生え放題になっていたのがかなり木がツリにナリ取り作業を行った。この作業を終えていく間、みみりうちに人が行動できる範囲が拓けていってのがわかった。

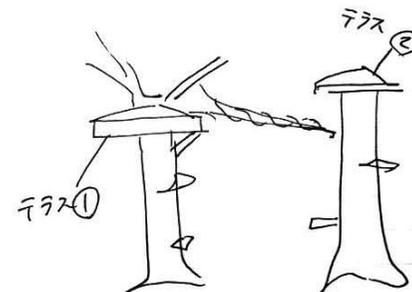
庭師さんの話にも出ていたが、視線の誘導だけでなく、同時に行動範囲を拡大していている様感じた。自然の中にものづくりをする事は工芸にとってはかなり身近な事であるが、手を加える過程で新たに自然が見える一面を生かせば共存している様な一体感のある作品が出来ると感じた。可能性はかなり重要になってくると思う。

テラスに至りまでの道づくり、という感じで階段をつけていたが、木に少し傷をつけてかませせて、びくとも動かないのはかなり感動した。が、3m以上土に、傷つけた木の枝から新芽が舞吹いていたのには本当に驚いた。そこに生きている、という存在を明らかにして、作品になろうとしている素材が、作品にあがっている様子を思った。その後、極力木を傷つけないように作業をしていたので、あるいみ木との共存バランスを取らせられているのかもわからない。

テラスに向かう階段づくりと同時に平行で、テラスはりも始まった。この時、階段に使用した板の側面には大量のダンゴムシが生息し始めており、即ち生物の一部としてリメイクしていき印象をつけていた。

今後のプランとしては、

- テラス①にナリ(柵)をつける
- ^{ナリにナリ}テラス②を完成させ、①との行き来の場所をより行き来しやすくする



また、夏場は虫などもかなり多く危険であるので、できれば朝や、もう少し秋にせいか、これから細かい作業をしたいと思う。

なお、マダニ対策として、以下の対策をあげておく。

- 作業は3で口から侵入されないように長ぐつと長ズボン着用。
- 作業中、木々の傾りで座りこみで登るとは水子リスワが高いので、できただけ座りこまない様にし、つちのいえ内で抱えたとの接触時間を短縮する。
- 作業後は必ず衣服をはたいておく。←重要

鈴木 秀子

13314

ツリーテラス 班

ブランコの作製

つたとロープと板で
簡単につくったものだが、遊具が
つくりたがったので、後期は
そろそろ集中したい。

第一ブランコはブランコの板と
つたのがつたので弱わがた。
強度などを考えてロープなどかた。

白いロープは溶けつかないので、
黄カビに染れてもいいと思う。



枝先を切ったあと
木がそこそこの底に枝を増やすのは、また前だが、おもしろいから。

? 野ばらをとくさん刈った。
ツリーテラスの東側の地形は、大きな樹がわりと
開けていて、不思議だ。
後期はもっとよく観てみたい。



3本のつたと取ったもの
みんな手で協力して
やると編める。たが、あつ

板のせいで座3つに3つが
いたが、たので
ロープをまいて、固定

植物観察会

学校は傷にやわい。樹液にとらばんがわりと
キコなど、菌類がつかやす。たが
ツラカが強いと先生がいわれた意味は
傷をつけても、菌類がつかにくいということか。

!! きのこというものは、探すとおもしろい。

樹まわりのワイについて考えたことは
なかつたが、植林された時のものとわがた。
あ、くいがあることで、樹の幹が大き
成長したことがわかる。

今後

- もう少し周りの植物の観察をしていく。
おもしろい違いを見たい。
- ツリーテラスの床を12月終えるのと
同時に、ハニモック、ブランコの作製に
集中したい。

近づき隊



植物観察会

7月9日 15時～
徳岡駒子先生による「植生地理学から読み解く丘の現状」



3時のお茶



7月23日